國學院大學学術情報リポジトリ

芭蕉俳諧に表現された漢詩文：享受とその変容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚越, 義幸, Tsukagoshi, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002454

芭蕉俳諧に表現された漢詩文―享受とその変容―　要旨

塚越義幸

本論考集では、芭蕉の教養としての漢詩文だけではなく、彼の俳諧作品の中に表現された漢詩文、つまり彼が漢詩文をどう捉え（享受）、どう俳諧作品として昇華させたか（変容）について考究した。

芭蕉俳諧に影響を与えた漢詩文についての研究は、すでに仁枝忠氏『芭蕉に影響した漢詩文』（教育出版センター　昭和四十七年）や廣田二郎氏の『芭蕉の藝術　その展開と背景』（有精堂　昭和四十六年）や『芭蕉と杜甫　影響の展開と体系』（有精堂　一九九〇年）、太田青丘氏の『芭蕉と杜甫』（法政大学出版局　一九七一年）、曹元春氏の『杜甫と芭蕉』（白帝社　二〇〇〇年）などに代表される。『別冊國文學　芭蕉必携』（學燈社　一九八〇年）の典拠（漢詩文）の項目では、漢詩文の典拠一覧が示されている。

今回はそれら先行文献文献を踏まえつつ、特に漢詩文を盛んに摂取していた漢詩文調期（延宝から天和）から貞享期、作品としては『おくのほそ道』を中心に、単に出典論に止まるのではなく、さまざまな角度から捉え直してみた。特に『おくのほそ道』現存最古の注釈『おくのほそ道鈔』における漢詩文の引用とその解釈においては、今まで言及にない調査研究である。

各部（全五部・十九章）の概要を示すと以下のようになる。

「第一部　芭蕉俳諧と漢詩文調」では、

漢詩文調の文体を芭蕉の和文体の作品と漢詩文体の作品（『七百五十韻』と『俳諧次韻』）を対照させながら、その独自性を五項目に分けて浮かび上がらせ、また彼が「詩」という語をどう捉えていたかを、さらに漢詩文調期の初期の作品であり彼の俳諧観が窺える『俳諧合』（『田舎の句合』・『常盤屋の句合』）の判詞でどのように漢詩文が扱われたかを考えてみた。

第一章「漢詩文の文体」では、

漢詩文調は単に漢詩文を引用して、諧謔をねらうというのではなく、和文調との融和対立を目指す中で、漢詩文を引き立たせる手法を取り、訓点なども使用し視覚的にも意外性を求めようとした点が特徴であり、それらを「漢詩題をもつもの」・「漢文体（訓点を施したもの）を用いたもの」・「漢文訓読体」・「句点〇を施したもの」・「〜を用いたもの」の五点に整理した。そして、それらの手法が、蕉風開眼の前段階としての位置づけがなされている点も指摘した。

第二章「芭蕉俳諧にとって詩とは何か」では、

芭蕉は「詩」という概念も漢詩文調と同様の視点から捉え、特に『田舎の句合』の嵐雪の序文に、

桃翁、栩栩斎にゐまして、為に俳諧無尽経をとく。東坡が風情、杜子がしやれ、山谷が気色より初て、其躰幽になどらかも。ねりまの山の花のもと、渭北の春の霞を思ひ、葛西の海の月の前、再江東の雲を見ると。螺子此語にはずんで、農夫と野人とを左右に別ち、詩の躰五十句をつゞる。章のふつゝかに、語路の巷のまがり曲れるをもって『田舎』とは名付たる成べし。仍以是に翁の判を獲たり。判詞、荘周が腹中を呑で、

希逸が弁も口にふたす。遠くきく、大江の千里は、百首の詠を詩の題にならひ、近所の其角は、俳諧に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なる事を知ル。しるといへば、我是をしるに似たり。しらずして爰に筆をとる、又是しらざるなり。（傍線は筆者による）

と示されたように、蘇軾・杜甫・黄庭堅などの唐宋の詩（漢詩）を題材として考えており、（「ねりまの山の花のもと・・・」には杜甫の「春日憶李白」を踏まえており、暗に李白を登場させている点も指摘）また当時流行していた『荘子』（『荘子鬳斎口義』林希逸注）の注釈を不要とするほど『荘子』の理解を深め、独自の解釈を試み判詞に投影しながら、其角らと「俳諧に詩を述べる」作風を模索していったことを指摘した。結局、芭蕉にとって詩（漢詩）とは、その世界を超克して、俳諧をより高雅なものに仕上げる題材の一つであったのである。

第三章「『俳諧合』に現れた漢詩文―芭蕉の判詞を中心に―」では、

『俳諧合』の芭蕉の判詞の特徴として、秀逸な句に対しては、平安時代から摂取されていた『和漢朗詠集』や『蒙求』など、また五山文学時代から受容されてきた『荘子』・『古文真宝』・『錦繡段』や杜詩などを五十番中二十三番に引用しながら、その句の優位性を示したことに触れた。

芭蕉ら蕉門は、談林俳諧のマンネリ化により誕生し、一過性な存在に過ぎなかった漢詩文調を、むしろ巧みに活用しつつ（断章取義的に）、また漢詩文の世界を超克しつつ新風（蕉風）を模索していったと考えられる。

「第二部　漢詩文調期の芭蕉俳諧と杜甫」では、

芭蕉の生涯を通じて敬慕していた杜甫の詩が、漢詩文調期にどのように影響を与えていたかを、『田舎の句合』の序文に見える「杜子が洒落」という語句、「わび」（特に初期深川草庵におけるもの）のとのかかわり、また出典の可能性を拡大し従来の漢籍の枠を超えて捉え、さらにその中の詩論『詩人玉屑』からの受容を探ってみた。

第一章「『田舎の句合』序考―「杜子が洒落」をめぐって―」では、

『田舎の句合』の序文（前出）に見える「杜子が洒落」という語句は、『詩人玉屑』に見られる「淡白閑静」や「風流醞藉」などのイメージを踏まえており、従来の杜詩の社会詩としての沈鬱な詩情とは異なる享楽的な部分も取り込んだ意味合いで用いており、手法としては江戸の地名を織り込み、杜甫の詩「曲江」を引用した其角の「樽うた」と共通していることを述べた。

第二章「芭蕉の初期の草庵を場とする「わび」―杜詩とのかかわり―」では、

芭蕉が深川の草庵に移居して間もない頃の作品を通じて「わび」と杜詩との関わりを考察した。この時期の「わび」は清貧を重んずるもので、杜甫の詩を「杜子が洒落」として捉えつつ、その実践を試みていた傾向が強い点を指摘した。ここでも、伝統的な「わび」とは異なる新たな俳諧への試みが看取できると思われる。

第三章「深川移居前後の芭蕉俳文に現れた杜詩―その出典をめぐって―」では、

延宝から天和期の杜甫の詩は、当時流行していた『杜律集解』・『杜詩絶句』や『古文真宝前集』・『聯珠詩格』・『千家詩』・『円機活法』・『詩人玉屑』・『氷川詩式』・『詩林広記』などを出典とすることが一般的であるが、従来指摘されてこなかった韻書『五車韻瑞』や作詩作法書『詩律初学抄』・『初学詩法』などにも言及し、さらに『類船集』・『俳諧無

言抄』など俳書からの受容も検討してみた。特にここでは芭蕉の杜詩の受容の仕方に、断章取義的に傾向が強いことが明白になっている。

第四章「芭蕉俳諧と『詩人玉屑』―杜甫の受容をめぐって―」では、

五山僧や連歌師が盛んに読んだ『詩人玉屑』に記述されている杜甫の詩論（古今の詩の集大成・熟慮を重ねた作詩・変化など）との関わりを考察し、特に「工（たくみ）」という語の用法という視点からの受容を取り上げた。芭蕉が漢詩文を引用する際の、断章取義の傾向が、『詩人玉屑』のような詩論・詩話などからの影響が強かったのではないかということにも触れた。

「第三部　貞享期の芭蕉俳諧と漢詩文」では、一般的に貞享期は漢詩文調は影をひそめたとの認識であるが、俳文においては依然漢詩文の引用は盛んに行われている実態を捉え、具体的に漢詩文の素養の高い素堂とのやり取りが行われた作品である「四山の瓢」と「蓑虫跋」を取り上げてみた。

第一章「蕉風樹立期の芭蕉俳諧と漢詩文」では、

漢詩文調が一段落して、芭蕉がさらに新風を模索し、蕉風を樹立していく中で漢詩文は決して不要な存在ではなく、むしろ俳文の中では和文との融合対立の中で重要な働きするようになった点を、漢詩文調期から『野ざらし紀行』など貞享期の俳文への変遷をたどりつつ明らかにした。そこには第一部第三章で触れたような漢詩文調に引用された二系統の漢籍が介在しており、それが蕉風樹立への一つの柱となり、また俳文の形式を整える手法になっていった点も指摘した。

第二章「四山の瓢考 ―素翁李白にかはりて、我貧を清くせんとす―」では、

芭蕉の俳文「四山の瓢」の中にはさまざまな漢詩文（李白の他、顔回・許由・杜甫そして『荘子』など）が引用されているが、「素翁李白にかはりて、我貧を清くせんとす」には、素堂との隠者志向の共有、さらには第二部でも取り上げた初期の草庵の「わび」の実践が込められていた点を指摘した。

第三章「蓑虫説跋考 ―離騒のたくみ有に、たり―」では、

素堂の「蓑虫説」に与えた芭蕉の跋文に見られる「離騒のたくみ有に、たり」の意味を考察した。「離騒」は当時屈原の七作品全体を指しており、『離騒経』すなわち『楚辞』そのものを指していたと考えられ、その中の「遠遊」や「漁父」に示された無用の用や自得、隠者思想などを踏まえた可能性を指摘した。併せて「離騒のたくみ」には第二部第四章でも論じた『詩人玉屑』が関わっている点も触れた。

「第四部『おくのほそ道』と漢詩文」では、

『おくのほそ道』における漢詩文の従来の出典論に対し、補足ないしは別の視点から捉えた考察を「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」他四例を挙げてみた。さらに「田一枚植て立ち去る柳かな」の章の解釈から派生して、『おくのほそ道』現存最古の注釈である『おくのほそ道鈔』に引用された漢詩文全七十八箇所をすべて調査し、その特徴を捉えてみた。

第一章「田一枚植て立去る柳かなの解釈をめぐって―陸機「猛虎行」とのかかわり―」では、

『おくのほそ道鈔』の「田一枚植て立ち去る柳かな」の注に引用された陸機の「猛虎行」（当時の故事成語となっていた冒頭二句）から、芭蕉（予）の『おくのほそ道』の旅への清廉な姿勢を読み取り、旅の目標の一つである白河の関を越えることを果たすべく、遊行柳ですら長居をする場ではなく、速やかに退出してするべきだと捉えた新たな句の解釈を試みた。

第二章「国破れて山河在り、城春にして草青みたりの解釈をめぐって」では、

芭蕉は、『おくのほそ道』平泉の章で、眼前に開けた五百年前の古戦場の現実の世界を見て「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」と杜甫の「春望」の首聯を引用した。この二句の解釈は、従来自然の雄大さを説いたものが多いが、『杜律集解』他当時よく読まれた杜詩の注釈では、人間の営みと自然を対比し、自然のみが蔓延るのは人間の営みが果たされていないことの象徴であると解釈しており、芭蕉も同様の解釈をしていたという立場から解釈を再考してみた。また本文では「春望」の二句目「城春にして草木深し」の「草木深し」を「青みたり」と変容しており、そこには杜甫の詩情を踏まえつつも眼前の「青」つまり梅雨空のくすんだ灰色をも表現していたのではないかと指摘した。

第三章「山刀伐峠　高山森〳〵として一鳥声きかずの典拠をめぐって」では、

従来「高山森〳〵として」の典拠は、杜甫の「蜀相」の「錦官城外栢森森」であるとされてきたが、ここでの「栢森森」は針葉樹林であり、ブナ林の山刀伐峠のの光景にはそぐわない。別の典拠として李白の古詩「荊州浮舟蜀江」の「碧樹森森迎」の可能性を挙げてみた。

第四章「山中温泉　曽良との別れ　―隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし―」では、

山中温泉で芭蕉（予）と曽良が別れた場面を表現した「隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし」は『蒙求』「李陵初詩」の詩句を引用しているが、原詩は「雙鳧」であるが敢えて「隻鳧」と変容させて（造語の可能性もある）死別するかもしれない別れをも「しゃれ」る俳諧師の執念を表現したのではとの指摘をした。

第五章「『おくのほそ道鈔』と漢詩文　―引用とその解釈―」では、

『おくのほそ道鈔』に引用されている漢詩文七十八箇所百十四例の実態調査を行った。引用された漢籍は、『論語』十一例をはじめ、杜甫九例・『孟子』八例・『字彙』七例・『荘子』・『文選』六例・『白氏文集』五例・『詩経』・『古文真宝後集』・『唐詩選』四例などである。従来からこの注釈には牽強付会で意味不明な注釈が多いとの指摘の通り、漢詩文引用においても同様な結果が現れた。しかし、現在にも受け継がれている出典も多数あり、存在意義を認めることはできる。また、注釈者のひとり荻澂水の師は荻生徂徠とのかかわりの深い田中洞江であった可能性を示唆した。そのことが芭蕉にはかかわりの薄い『唐詩選』を出典として挙げている理由である点も指摘した。

「第五部　芭蕉俳諧と漢詩文とその周辺」では、

俳諧付合語集であり漢詩文の引用の多い『俳諧類船集』における漢詩文引用の実態と芭蕉俳諧への影響の可能性、また芭蕉が「楊貴妃」をどのように作品に反映させていたか、さらに芭蕉本人ではなく、其角の句に表現された釈奠の状況を捉え、芭蕉をとりまく漢詩文の環境を考えてみた。

第一章「『俳諧類船集』と中国古典　―『古文真宝』を中心に―」では、

付合語集の『俳諧類船集』引用されている漢詩文の実態調査を行った。それによると、引用箇所は判明しているだけでも五百箇所を超え、漢籍は書名のわかっているものだけでも五十種類、その中で抜きんでているのが『古文真宝』百四十五例であった。以下『論語』四十四例。引用の仕方は圧倒的に断章取義的であって、付合語に関連のある取成付けの題材とされている。そのあたりに本来保守的と言われた著者梅盛の積極的な編集態度が窺える点も指摘した。

第二章「芭蕉俳諧と『俳諧類船集』―『古文真宝』引用例を題材に―」では、

第一章を踏まえ、芭蕉俳諧との関わりを引用数の多い『古文真宝』の引用例から具体的に論じてみた。その結果「さぞな都」百韻・「須磨ぞ秋」百韻・「見渡せば」百韻・「花に浮世」歌仙・「独寝の草の戸」詞書・「深川八貧」・「夏の時鳥」・「紙衾ノ記」・「烏賦」の九例の中に該当する漢詩文の引用が見られた。これらも典拠の一つとして加えることができることを示唆した。

第三章「芭蕉俳諧と楊貴妃」では、

芭蕉俳諧に示された「楊貴妃」は、それまでの俳諧の本意である「恋の詞」・「長恨歌」「楊貴妃桜」などを踏まえつつも、旅の愁いや友情などとの対立概念として用いていた。また、「長恨歌」の「旧衾故枕」の出典としては、『古文真宝前集諺解大成』に引用される『唐詩解』の可能性を示した。さらに越人の句の前書きに引用された「長恨歌」の本文から、彼は『白氏文集』の馬元調本の本文を踏まえていたことも指摘した。

第四章「俳諧に見える釈奠 ―其角句 聖堂にこまぬく蝶の袂哉をめぐって―」では、

其角の「聖堂にこまぬく蝶の袂哉」が、実際には参観不可能ではあったと思われるが、元禄四年二月十一日開催の釈奠を詠んでおり、俳諧として釈奠を題材とした先駆的存在として位置づけられることを指摘した。

芭蕉俳諧に表現された漢詩文というテーマで、漢詩文調期とその後の貞享期、『おくのほそ道』を中心に考察をしてきた。全体を通じての傾向としては、芭蕉は漢詩文を断章取義の手法で作品に反映させ、本来の漢詩文の意味からは必ずしも同一とは言えない変容を試みていた。漢詩文は俳諧師にとっては題材の一つに過ぎない。そのような中、漢詩文はすでに俳諧師芭蕉の手中にあり、俳諧の本質ともいえる洒落や滑稽を目指しつつ、やつしや見立てという手段を通じて、それらを超克して弄ぶ姿が見られた。そこには漢詩文を理解し享受する立場から、俳諧作品への変容というさらに一段高次の世界が生み出されるのである。それが俳諧に漢詩文を表現するということになろう。

漢詩文調期の漢詩文優位の時期から、その反動で漢詩文が表層から消えつつあった貞享期においても、特に俳文では和文との融合対立の中、漢詩文は活かされ続けてきた。それが俳文の一つの特徴にもなった。『おくのほそ道』においては、松島・平泉・象潟などの名勝では漢文調で感動の強さを表し、漢詩文の役割を明確化していた。後世の注釈においてもその典拠が明確にされ『おくのほそ道鈔』はその嚆矢としての位置づけがなされた。

芭蕉は、漢詩文に於いては漢学者について学んだ形跡もなく、田中善信氏の説かれる如く高い知識は持ち得なかったと思われる。しかし、それらを補填してくれたのは、漢詩文の専門家に師事した友人の素堂や弟子の其角たちであったろう。